

ただのりのみやおち こきょう はな へいけものがたり
忠度都落 2：故郷の花（『平家物語』）

へいけものがたり ぐんきものがたり だいひょう さくひん へいあんじだいまつき へいけいちぞく こうぼう
『平家物語』は軍記物語を代表する作品で、平安時代末期の平家一族の興亡
えが ぎをんしゃうじゃ かね こゑ しぎやうむじやう ひび しゃらさうじゆ はな
を描いたものです。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の
いろ じゃうしゃひつすい ことわり ゆうめい ぼうとうぶん しめ
色、盛者必衰の理をあらはす」という有名な冒頭文に示されているように、
たいらのきよもり ひき へいけ えいが けんせい ほこ げんじ ついとう う
平清盛の率いる平家が栄華をきわめて権勢を誇り、やがて源氏の追討を受け
めつぼう ありさま さまざま おま かた
て滅亡する有様が、様々なエピソードを織り交ぜながら語られています。

へいけものがたり げんけい せいぎぜんはん せいりつ い ごと
『平家物語』の原型は13世紀前半には成立していたと言われますが、その後
かいてい ぞうほ く かえ かずおお いほん う へいけものがたり しょほん
改訂・増補が繰り返され、数多くの異本が生まれました。『平家物語』の諸本は、
よもの か よ ほんけい びわほうし かた つた かた ほんけい
読み物として書かれた読み本系と、琵琶法師によって語り伝えられた語り本系
たいべつ げんざいもつと ひろ よ せいきこうはん せいりつ かた ほん
に大別されます。現在最も広く読まれているのは14世紀後半に成立した語り本
けい かくいちほん かん かんじょうのまき つ こうせい
系の覚一本で、12巻に灌頂巻が付いた構成になっています。

かくいちほん へいけものがたり まきだいなな ただのりのみやおち ねん じゆえい
テキストは覚一本『平家物語』巻第七の「忠度都落」です。1183年（寿永2
ねん みなもとのよしなか たたか やぶ へいけ いちもん みやこ はな にし のが
年）、源義仲との戦いに敗れた平家の一門は都を離れて西へ逃れます。そ
なか たいらのただのり みやこ ひ かえ うた ししやう しゆんぜいきやう じさく うた か
の中で平忠度は都に引き返して歌の師匠である俊成卿に自作の歌を書い
まきもの わた ちやくせんわかしゆう じぶん うた い たの ただのり よくねん
た巻物を渡し、勅撰和歌集に自分の歌を入れてほしいと頼みます。忠度は翌年
せんし しゆんぜいきやう せんざいしゆう ただのり こきやう はな だい うた い
戦死し、俊成卿は『千載集』に忠度の「故郷の花」と題する歌を入れます。
ただのり しゆんぜいきやう わか つ さ とき ろうえい く おおえのあさつな
忠度が俊成卿に別れを告げて去っていく時に朗詠した句は、大江朝綱
（886-956）の作で、古今の優れた漢詩文・和歌を集めた『和漢朗詠集』（藤原
きんとうせん ねん しゅうろく めいく ねん えんぎ ねん ぼっかい
公任撰、1018年）にも収録された名句です。もともとは908年（延喜8年）に渤海
からの使者が帰国する際に送別の句として作られたものです。

ほんぶん しゆってん
本文の出典：

いちこていじ こうちゆう やく へいけものがたり しんべんにほんこてんぶんがくぜんしゆう しょうがくかん ねん
市古貞次 校注／訳『平家物語②』（新編日本古典文学全集46）小学館、1994年